

所属	生涯福祉研究科 生涯福祉専攻 修士課程	修了年度	平成 24 年度
氏名	小口 碧	指導教員 (主査)	荒牧 美佐子

論文題目	家庭的保育の現状と課題 —家庭的保育者への実態調査から—
------	---------------------------------

### 本文概要

**1. 研究の目的** : 家庭的保育を実施している保育者が、現状をどのように感じ受け止めて家庭的保育を実施しているのか、その実態を知ることである。そのために、家庭的保育に関する先行研究を参考に、家庭的保育者へのアンケートによる実態調査を実施した。また、①家庭的保育者の現状と保育を支える労働環境 ②施設保育所と比較した保育の質 ③グループ型(共同型)家庭的保育の可能性 ④今後の家庭的保育の取り組みへの課題の、4点の主題について検討した。

**2. 研究方法** : **第1研究(インタビュー調査)** 施設保育士・園長経験者へのインタビュー調査により、施設保育士が家庭的保育をどのように評価しているのかを、家庭的保育と施設保育(保育所)の「保育の質」を中心に比較検討した。施設保育士側からみた家庭的保育への評価を、子ども・保護者・保育者の3つの視点から整理した。**第2研究(アンケート調査)** 送付数は172件、回収は88件(回収率51.1%)。得られた回答を、SPSS統計ソフトによって分析した。調査内容は、①属性 ②保育形態 ③施設保育と比較した家庭的保育についての30項目(4件法) ④指定連携保育所の有無 ⑤連携保育所との関係についての11項目(4件法) ⑥研修体制 ⑦必要としている支援内容 ⑧家庭的保育周知への意見 ⑨共同型家庭的保育についての103項目とした。

**3. 研究結果** : **第1研究**では、施設保育士は、家庭的保育の個別対応性の高さは認めているものの、労働環境や保育内容の不透明性を懸念しており、全体的にデメリット要素の認識が強かった。開放的な保育実施のために人的配置の改革と、保育所の人材および設備の活用が挙げられた。共同型家庭的保育に関しては、施設保育所のように、組織的な保育ならば運営可能であるという見解であった。**第2研究**の対象者は50代以上が70%以上、所持資格は保育士80%・幼稚園教諭12.5%・幼保両資格所持者43.2%で、保育所勤務経験年数は平均8.9年、家庭的保育実施年数は平均8年であった。その就労働機は収入ではなく「保育所にはないきめ細やかな保育ができるから」という保育観であり、0~2歳児の保育には家庭と同質の落ち着いた環境が不可欠であるという意味であった。さらには、保育所と同質の保育を求めない保育観であり、働く親への個別対応と信頼関係づくりを可能にする保育こそが保育の「質の高さ」につながるとする信念であった。個人型家庭的保育者の、デメリットカバーの方策の一つとしての共同保育所の志向性について尋ねた。結果を(A群:積極的群9%)・(B群:消極的群24%)・(C群:拒否的群36%)・(D群:わからない群26%)に分類し、分析した。多くは共同型保育については保守的考えをもち、施設保育所と同様の環境を望んでいなかった。

**4. 考察** : 待機児の8割が0~2歳児という現状に加えて、乳幼児の発達が基本的信頼感の形成という個別の信頼関係の形成という課題にのっとなっている。家庭的保育が、フランスを始めとする西洋先進諸国の乳幼児保育の主要な形態であることから、保育システムの世界的な動きの一環であると考えられる。しかし、家庭的保育を施設型保育所の補完、待機児対策としてのみ考えるのではなく、より積極的な位置付けを定めるには、様々なデメリット解消の方策が整備されなければならない。そのためには、連携保育所と研修体制の整備・研修時間や機会の保障が不可欠であり、施設保育所と同等の保育環境の整備のための諸支援が求められている。さらには、家庭的保育者の労働環境の整備である。質の高い保育実施の基礎である、保育者自身の保育観に基づいた保育を実現するためには、労働環境の保障が必要である。しかし、共同型家庭的保育は労働環境を見直すための手段であるという積極派は少なく、共同型家庭的保育への積極的な意思は感じられず、あくまでも個人型の保育の志向性が高いことが分かった。